

第18回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚

～文園に花開いた江戸学～



展示期間：令和3年11月27日(土)～令和4年1月27日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに	1
三田村鳶魚	2
鳶魚の人物評	3
三多摩壮士時代	3
三田村鳶魚を取り巻く人々	5
鳶魚の江戸研究	6
鳶魚と時代考証 / 鳶魚と吉田書店（したよし）	
鳶魚と勉強会	8
○森銚三	
鳶魚の協力者	9
○柴田宵曲 ○大野静方	
鳶魚の友好関係	11
○井伏鱒二 ○岡本経一 ○海音寺潮五郎 ○河竹繁俊	
鳶魚と文壇批判	14
○白井喬二 ○土師清二	
鳶魚が尊敬した人	16
○坪内逍遙 ○南方熊楠	
早稲田大学演劇博物館～逍遙先生のおそばに～	19
鳶魚が歩いた中野	20
鳶魚終焉の地	24
年表	26
展示風景・展示物	38
ブックリスト	41



はじめに

中央図書館では、毎年、中野区ゆかりの人物を特集する展示を行っています。
今年度の特集は江戸風俗研究家・三田村^{みたむらえんぎよ}鳶魚です。

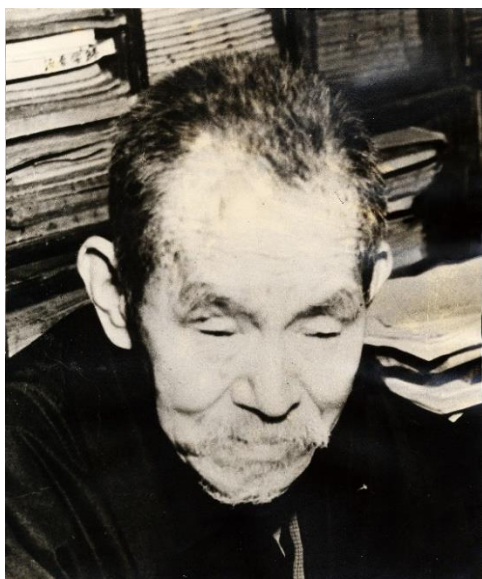
江戸時代のあらゆる分野の考証を行い、その膨大な知識量と多岐にわたる研究の業績から「江戸学の祖」「江戸通の三大人」「最後の町学者」「大衆文壇の^{けびいし}検非違使」など様々な異名を持つ三田村鳶魚（1870-1952）。約25年の歳月を過ごした中野時代は、意欲的な研究・執筆活動を行っていた時期と重なります。

文園（現・中野6丁目）に構えた邸宅では定期的に勉強会が開催され、作家から市井の研究者まで様々な人が出入りをしていました。また、鳶魚の日記には私たちに馴染みのある中野のお寺や地名がしばしば登場し、その足跡を辿ることができます。

本展では、経歴や業績、交流のあった文化人を通して、三田村鳶魚の世界を紹介します。

みたむらえんぎよ
三田村鳶魚

明治3(1870)年3月17日～昭和27(1952)年5月14日



▲ 三田村鳶魚
早稲田大学演劇博物館：所蔵

本名三田村玄龍^{げんりゅう}。明治3年武蔵国八王子(現・東京都八王子市)生まれ。千人同心の家系に生まれ、青年時代に三多摩壮士として政治活動に奔走。日清戦争では中外商業新報社の従軍記者として第二軍第一師団に配属された。戦後、各地の新聞社を転々とし、山梨日日新聞記者として明治38年まで甲府に暮らす。後に民報社、甲府新聞社にも在籍した。この年、「甲斐方言考」を雑誌『風俗画報』に発表し、以後同誌に多くの連載をもつ。また、この頃より雑誌『日本及日本人』を舞台に本格的に執筆活動を始め、歌舞伎芝居と史実との関係を連載。その後、研究の対象を江戸文化全般に広げていく。ペンネームは

はじめ「捉雲・雲・鳩摩・くも・白衣蒼狗」などを用い、その後「風流五百生・没巴鼻」なども使用していたが、大体は「鳶魚」で統一されていた。「鳶魚」は『詩経』にある「鳶飛んで天に^{いた}戻り魚淵に躍る」という古句からとったもの。その膨大な知識で「江戸通の三大人」、「江戸学の祖」とも呼ばれた。昭和27年、山梨県湯沢温泉郷の不二ホテルで没する。鳶魚が死去する際、枕元にいたのは不二ホテル経営者である高野家の家族、不二ホテルの女中、近隣の住人で鳶魚の話し相手をした高野智氏、ホテルの下宿人で新聞記者の内藤氏であった。鳶魚は舟に揺られる旅人の話をしている、すうっと眠るように息をひきとったという。享年83。代表作に『御殿女中』『加賀騒動』など。

大正9年8月、中野町に夫人と移り住んだ鳶魚は、11年頃より文園町(現・中野6丁目)に家を建て、昭和21年にこの地を離れるまで、約25年という長い期間中野に暮らした。

「安普請」と鳶魚が語る文園の家は、寺生活の長かった鳶魚の好みらしい柱の高い家で、窓を塞がないようにしながらも沢山の本棚が並び、庭には時期になると萩の花が咲き誇った。この家では輪講と呼ばれる勉強会を定期的に行い、大衆作家、時代小説家、市井の研究者たちに講義をしながら、自らも精力的に勉強を続け、数多くの著書を執筆した。

鳶魚の人物評

学生時代に鳶魚の仕事を手伝った逍遙協会理事長・菊池明は、鳶魚の晩年の容姿について、「瘦身、背はかなり高いほう。やや面長、胡麻塩の髪を短く切っている。あご髭、口髭、長い白い眉、瞼が垂れ下がっていて、その奥の白眼がちの眼は鋭かった」と書き残している。また、たばこが好きだったようで、髭がヤニで黄色く染まっていたことも記してある。薄い下唇を突き出すような格好で喋り、歩く時は杖などはつかず、そっくり返って歩いていたようだ。

鳶魚の性格はかなり気難しかったらしい。下駄の脱ぎ方が悪いとって玄関で追い返された人もいる。書誌学者の森銑三もりせんぞうは、「翁はざつくばらんで、近づき易くはあったが、そうかといってお人よしなどというのではなく、見様によっては、気難しいひとで、一時期翁に接近しながら、何かのことよりして翁の怒りを買って、破門を申し渡された人なども幾人もある」と語る。『東京市史稿』などの編者を務めた島田筑波は、「また三田村先生に破門されてしまった。これで何回目かなあ」と苦笑していたという。しかし、このことから一度破門されてもそれきりではなかったことが分かる。吉田書店の主人、吉田吉五郎など共通の知人に仲裁してもらい、また鳶魚の元に戻ってきた人物もいた。

鳶魚没後、演劇研究家の河竹繁俊かわたけしげとしは「おれと君は、おしまいまで三田村さんに叱られずに済んだね」と菊池に話しかけたという。菊池は「何処か優しさがあって、ひとの言うような厳しさやこわさは感じられない」と鳶魚の印象を語る。鳶魚は、夫人のことを「ハゼさん」と呼んだり、晩年の世話をした不二ホテルの女中さんも「メバルさん」と呼ぶなど、あだ名をつけるのが好きなユーモラスな一面もあった。

三多摩壮士時代

若い頃の鳶魚は三多摩壮士として活動していた。壮士とは自由民権運動の活動家の意味で、特に三多摩(北多摩・西多摩・南多摩の三郡、明治26年までは神奈川県に所属)出身の壮士は、その結集力と武力で有名だった。鳶魚は、板垣退助率いる自由党のメンバーであった後藤象二郎の玄関番なども務めていたことがあるという。

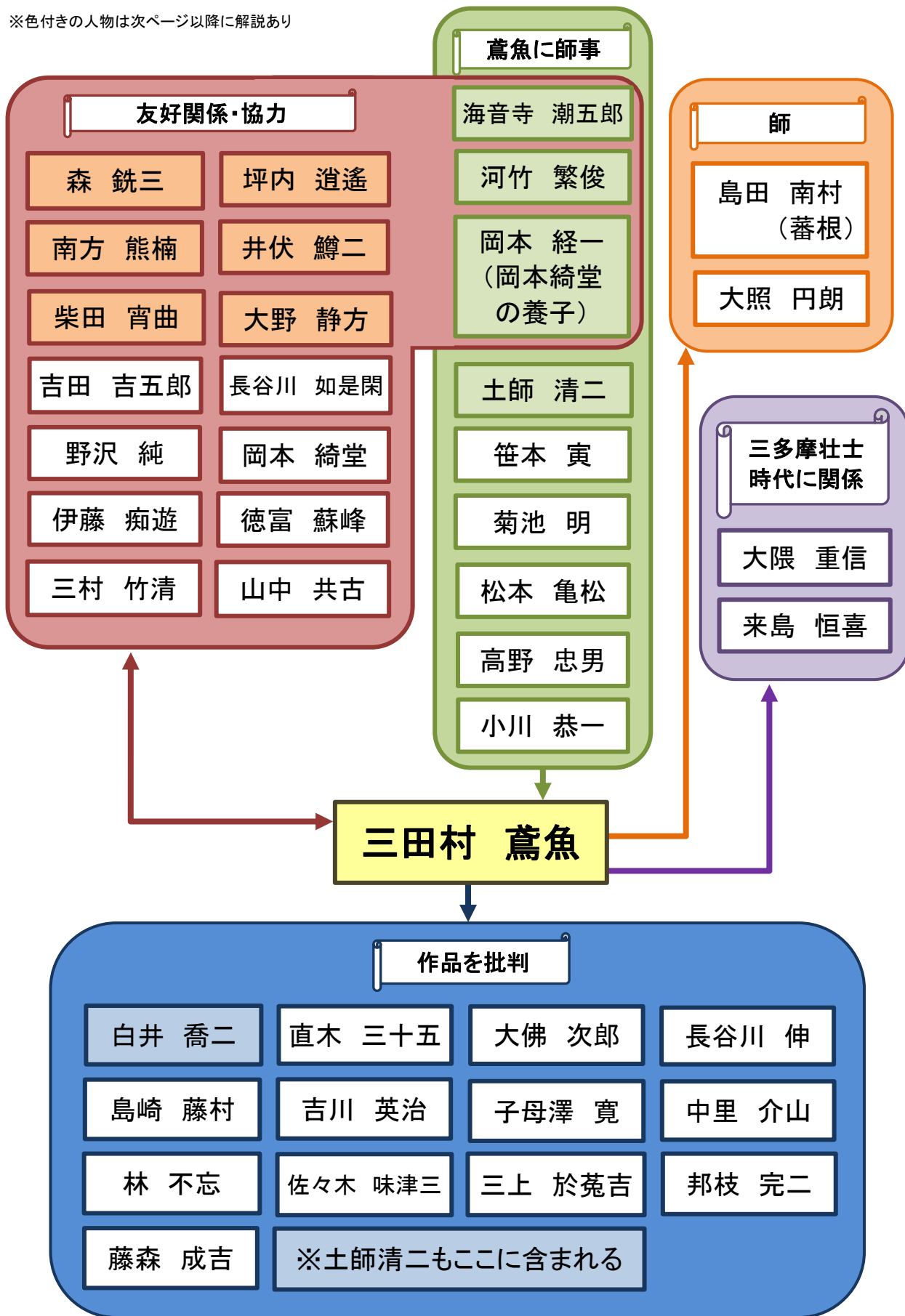
明治 22 年、当時の首相大隈重信が三多摩壮士に襲撃され、片足を失う事件が起こった。爆薬を投じたのは玄洋社の来島恒喜^{くるしまつねき}だったが、鳶魚もこの事件に関わっていた。柴田宵曲^{しばたしょうきよく}によると、大隈が閣議を終え、桜田門から霞が関の外務省の構内に入ろうとした所を狙い、来島が爆弾を投げた。大隈の乗っていた馬車が来るタイミングを、坂の上から手を振って合図をしたのが、当時 20 歳ほどであった鳶魚であるという。仲間内で申し合わせていた通り、来島はその場で自決。鳶魚は三田村玄龍の名前で検挙されている。鳶魚はまもなく証拠不十分で釈放されたが、それは入院中の大隈が、共犯容疑者逮捕、未決収監の噂を聞いて「一人や二人、放り込んでみたところで何になる、放してやれ」と言ったのが切っ掛けだった。鳶魚が早稲田を鼻負するようになったのは、早稲田大学創設者である大隈のこの一件も、一つの要因ではないかと云われている。

また、鳶魚は大の写真嫌いで有名で、鳶魚が写っている写真は数えるほどしか残っていない。その原因は、この事件で警察に逮捕された際、薩摩緋の着物を着て、手錠アミ笠、腰縄の姿を写真に撮られたことにあるという。

鳶魚は、谷中の全生庵で行われた来島の五十回忌の法要に参加。その際、雑誌『大日』に「来島恒喜君五十回忌」という文章を寄せている。過去のことをあまり語らない鳶魚だったが、晩年、「来島は襲撃の前夜、吉原にいたんだ」という裏話を、小説家の野沢純に話していたようだ。鳶魚にとって当時の思い出は何か特別なものがあったのだろう。

三田村鳶魚を取り巻く人々

※色付きの人物は次ページ以降に解説あり



鳶魚の江戸研究

鳶魚が江戸研究を始めた切っ掛けについてはよく分かっていない。鳶魚の口述筆記を務めていた柴田宵曲は、明治40年に雑誌『日本及日本人』が出版され、同誌に執筆するようになって以後、鳶魚の江戸研究が始まった、としている。

鳶魚は自分の過去を多く語らない性格だったので、江戸研究がまったくの独学だったのか、誰かに師事していたのかも分からないが、明治初期生まれの鳶魚にとって、「江戸」は具体的なイメージがもてる身近な存在だったのだろう。

鳶魚と時代考証

鳶魚は執筆する際に出典をほとんど明記しなかった。そのため、当時の歴史学界ではあまり評価されていなかったようだ。

ではどのような資料をもとに執筆していたのか。鳶魚は日頃、「世の学者は手で書くが、俺は足で書く」と自慢していて、その言葉通り、資料が残っている旧家を尋ね歩いては、虫食いだらけの古文書類を丹念に読み漁った。当時、古文書が家に残っており、しかも整理されている家などは殆どなく、情報収集は大変な仕事だった。

また、当時の事情を知っている生存者を探し、聞き取った内容も重要な情報源とした。『御殿女中』は、幕末に御殿女中だった村山ませ子という女性のもとに根気よく出掛け、6～7年かけて聞き取りし、執筆したものだった。他にも与力の生き残りである原胤昭や、浅野家当主の浅野長武、吉原関係では寿美江という女性に話を聞いて情報を集めている。しかし、出掛けて行って、気楽に会って話をしてくれるという条件を満たす人物はそう多くはなく、こちらも苦労したようだ。

鳶魚の頭には『徳川禁令考』という江戸幕府の法令集や、編年体で徳川将軍の政治的業績を記録した『徳川実紀』など、江戸時代を知る上での基本的な情報がたたきこまれている。その上で、当時の旗本や各藩の勤番侍などの書いた日記、随筆、見聞録など、それまで学者の間では研究の対象とされていないような資料に手を伸ばし、知識を深めていった。

資料を読み込み、当時の様子を知る人物に話を聞いて必要な箇所を書いておく。そうして

手に入れた知識は『含苞』^{がんぼう}という手控えノートに書き集めた。『含苞』は明治40年頃から作り始められ、それが鳶魚の考証の土台になっていたようだ。

鳶魚と吉田書店(したよし)

吉田書店(通称したよし)は、東京の下谷・御徒町(現・台東区台東)に明治20年から昭和25年まであった古本屋である。勝海舟、幸田露伴、正岡子規、森鷗外、永井荷風など沢山の著名な作家や学者が立ち寄った。

この「したよし」の主人である吉田吉五郎は話好きな性格で、吉田書店には人が集まり、一時は在野の学者、研究者、作家、詩人、俳人のサロンと化したこともあった。鳶魚も常連の一人である。作家の内田魯庵が鳶魚から聞いた話では、吉田吉五郎は鳶魚が通っていた小学校の近所に住んでいたため、二人は小学校時代から顔なじみであったようだ。

「したよし」は旧家に埋もれていた写本、日記、道中記などの資料を取り扱っていた。立場回りと呼ばれる人達が何人か回ってきて、そうした資料を持ち込んだのだ。立場回りは、廃品回収業者の集荷問屋ともいえるべき業者で、東京に数軒ある廃品回収業者を定期的に巡回し、価値のありそうな書物や絵などを買い取り、それを吉五郎の店へ届けた。そういったものの中には、紙屑として払い下げられた草双紙や錦絵、古文書などが多く含まれていた。

こうして入荷した珍しい資料を、吉五郎は店に出す前にまず鳶魚に貸して写本させ、その写本を和綴り製本して渡した。本の貸し料、製本料などは請求しなかった。鳶魚の著書は、多分に「したよし」の協力あって成り立っていたのである。更に吉五郎は資料の工面だけでなく、鳶魚の実母が急逝した際に急いで金を届けたりもした。

そんな吉五郎に鳶魚が寄せる信頼は厚く、周囲が驚くほどはっきり鳶魚にものを言っても、鳶魚も素直にそれを聞いていたという。また、関東大震災の時に焼け出されてしまった吉田一家に、鳶魚夫妻は被災中の住宅の世話をした。その際「吉田の親父さんには、こんなことではすまないぐらい世話になっているから」と照れ臭そうに笑ったそうだ。

鳶魚と勉強会

鳶魚はよく輪講という勉強会を開いた。鳶魚の開く輪講は、江戸時代の史料を深く研究するための勉強会で、ここに集まったのは、大衆作家・時代小説家たちであった。

最初の輪講は、大正6年1月に開催した十返舎一九の『東海道中膝栗毛』であった。町学者や江戸通が参加し、その内容は同年4月に発行された雑誌『日本及日本人』に掲載された。この連載は大正9年12月まで続き、雑誌記事を読んだ南方熊楠などの著名な学者が書を寄せ、記事の不備を補うなど盛況を博した。

輪講の流れとしては、まず他の人物が原文を読み、簡単な解釈をする。終わると鳶魚が大きな声で明快に意見を述べる。メモなどは持たず、記憶だけで順序だてて喋った。その後、他の出席者が意見を言い、それら全てを柴田宵曲が筆記する、という段取りであった。鳶魚主催の輪講は昭和24年2月井原西鶴の『懐^{ふと}硯^{ころすずり}』を最後に終了した。

輪講以外に、鳶魚の講話を中心とした勉強会も行われた。昭和12年3月15日に「満月会」が発足、戦後は昭和24年4月28日に寛永寺の塔頭の本覚院で「矢立会」の発会式を行った。矢立会の会員は25、6人と非常に多く、会場にしていた家の座敷では足りず縁側に座った人もいるほどだった。午後から始まり半日かけて行い、終わってから食事をして解散という流れだった。

矢立会が毎月開催されたのは、鳶魚に対する経済的支援という側面もあった。戦後、鳶魚が主に執筆していた雑誌は相次いで廃刊になり、周囲が見ても経済的に困窮しているのが分かった。しかし鳶魚は渡した金銭をそのまま受け取るような性格ではないので、聴講料を払うという名目ならば気軽に受け取ってくれるだろうと、会の参加者たちは毎月勉強会を開いては、鳶魚に聴講料を支払っていたのである。

もり せんぞう
森 銑三

明治28(1895)年9月11日～昭和60(1985)年3月7日

書誌学者・随筆家。愛知県碧海郡刈谷町（現・刈谷市）生まれ。刈谷図書館や名古屋図書館などに勤め、文部省図書館講習所を修了。東京帝国大学（現・東京大学）史料編纂所に勤

務した後、尾張徳川家蓬左文庫主任を務めた。在野の歴史家として、近世の人物研究や伝記を手掛け、晩年は早稲田大学で書誌学を講じた。著書に『近世人物叢談』、『森銑三著作集』全13巻など。享年89。

鳶魚が書いた随筆について、森が手紙を出したことを切っ掛けに2人の交流は始まった。そのうち中野の家で行われていた種々の会にも参加するようになった森は、勤務先で三田村鳶魚一派の人と言われることもあったそうだ。

森は鳶魚の江戸研究について、「翁は該博そのもののやうだつたといつてよく、事江戸に関する限り、翁に問うて即答の得られぬことなどはないところまでに行つてゐられた」と語っており、その知識に敬意を示していた。しかし、森は鳶魚と面識を持つ前から、鳶魚の研究内容について批判を述べることもあった。それは鳶魚の輪講会に参加するようになってからも変わらなかつたという。森は鳶魚と縁故ができたからといって忖度することなく、誤りや偏りがあれば忌憚なく批判を述べたという。「一同が先生であり、弟子」であるという鳶魚の輪講会の訓示どおり、自由闊達に学問を追求する場であつたことが窺える。

鳶魚の協力者

しばた しょうきょく
柴田 宵曲

明治30(1897)年9月2日～昭和41(1966)年8月23日

俳人・随筆家。東京市日本橋久松町(現・東京都中央区)生まれ。大正7年、ホトトギス社に入社して編集業に従事。後に、アルス版、改造社版の『子規全集』の編纂に力を注いだ。著書に『子規居士』、『宵曲句集』などがある。享年68。

大正7年、寒川鼠骨宅で開かれた『五元集』の第一回輪講会で筆記を務めたことで、鳶魚との縁が生まれた。柴田は「もし私の筆記がものにならぬということで、逸早く却下されたならば、(略) そうなれば鳶魚、若樹両氏との因縁も恐らく一回きりで断絶したであろう」と語る。

柴田の筆記は、かなりのスピードで話す鳶魚に対して、ゆっくりとした筆の運びで記録し

ながら、相槌を打つ余裕すらあったという。それを2、3日で、手を入れる必要が殆どないくらいに整え、鳶魚に渡していた。この様子は輪講会に参加した人々の印象に強く残った。森銑三は「中野の輪講の出席者で、宵曲子の筆記に感心せぬ人は、一人もいなかったらうと思ふ」と書いている。また、柴田の知識量は博覧強記と言われるほど多く、鳶魚が語ることの原拠となる資料を熟知した上で、鳶魚の原稿を整えていたようだ。鳶魚の著作の殆どは柴田の筆記によるものであり、鳶魚がいかにかその仕事ぶりを信頼していたかが窺える。

人柄については、「好き嫌ひが甚だしくて、容易に人を許さぬ人」であったとのことだが、鳶魚とは実に円満で、その「水魚の如き関係」は鳶魚が亡くなるまで続いた。

おおの しずかた
大野 静方

明治15(1882)年1月25日～昭和19(1944)年9月14日

日本画家。東京深川生まれ。本名兵三郎。父に浅草花屋敷の創設者である山本金蔵、兄にジャーナリストの長谷川如是閑を持つ。水野年方を師として日本画を学び、明治32年に「吉野の義経」で日本美術院褒賞を受けた。明治37年日本新聞に入社。『日本及日本人』の表紙画と裏絵を長年にわたって担当した。のちに浮世絵研究を始め、昭和17年には『浮世絵と版画』を出版した。享年62。

鳶魚と大野は膝栗毛の輪講会以降親密になり、著書の装丁の多くを大野が手掛けている。

鳶魚は小説だけでなく、当時の浮世絵に対してもその故実について批判したいと、大野に話していたようだが、しきりに「絵かきは骨が折れる、苦しいものだ」「さう故実風にぐづぐづ云ったら画はかけない」と説得されるのでやめにしたという。そのおかげで流行浮世絵作家からは悪く思われずに済んだと、後に語っている。そんな大野を鳶魚は、「如何にも友誼に厚い良友だつたといふことを、今日になればなる程痛切に感じます。かういふ友人がもつとあつたら、私のやうな人間でもさう人様から憎まれずに済むのではないかと思ふのです」と回顧している。大野は、人付き合いについて諭してくれる良い友人でもあったようだ。

▶ 下絵五十種（大野静方筆）

出典：『日本及日本人』（115）、政教社、1927年1月
（国立国会図書館デジタルコレクションより）



鳶魚の友好関係

いぶせ ますじ
井伏 鱒二

明治 31(1898)年 2 月 15 日～平成 5(1993)年 7 月 10 日

小説家。広島県深安郡加茂村（現・福山市）生まれ。早稲田大学文学部仏文専攻に学ぶが中退。大正 12 年、早稲田の仲間と始めた同人誌『世紀』に、「山椒魚」の原型である「幽閉」を発表。昭和 4 年頃から文壇に現れ始める。同 13 年には『ジョン万次郎漂流記』で直木賞を受賞。その後も数々の名作を生み、41 年には文化勲章を受章した。享年 95。

戦中、山梨県の疎開先で作家の野沢純を介して鳶魚と知り合った井伏は、甲斐善光寺や身延山に三人で出掛けるなど、交友を持った。井伏は鳶魚について「地獄耳のやうに記憶力がよくて話術にすぐれ、川沿いの道を散歩しながら明治時代の作家の噂を次から次に話してくれた」と思い出を語っている。

井伏は野沢純曰く、出不精で腰が重くなかなか動こうとしない性格だったようだが、戦後山梨の不二ホテルに移り住んだ鳶魚から、訪ねてこいという旨の便りがあった際は、すぐに見舞いに出向いた。その時のことを井伏は、「丸木橋」という随筆に書き残している。

昭和 43 年、鳶魚の没後、不二ホテルに建てられた「三田村鳶魚終焉之地」記念碑の除幕式では、挨拶を引き受けた。

おかもと きょういち
岡本 経一

明治 42(1909)年 3 月 25 日～平成 22(2010)年 11 月 15 日

出版社^{せいあぼう}青蛙房創業者。岡山県勝田郡勝間田町（現・勝央町）生まれ。13 歳で上京し劇作家・岡本^{ようしし}綺堂の書生となり、昭和 12 年養嗣子となる。30 年青蛙房を設立、江戸風俗や演芸の関係書などを出版。42 年菊池寛賞を受賞する。55 年出版社の 25 周年を記念し、自らの執筆によるあとがきをまとめた『私のあとがき帖』を出版。平成 2 年に引退した。編書に『岡本綺堂日記<正・続>』がある。享年 101。

鳶魚と岡本の出会いは、岡本が勤めていた大東出版社の「大東名著選」という企画の依頼

だった。岡本の養父である綺堂と鳶魚は頻りに書簡のやりとりをするような間柄だったが、その縁で鳶魚に会ったことはなかった。岡本は鳶魚に対しなるべく綺堂の名を使わないようにしていたが、後に綺堂の養子だと分かってからはなおさら可愛がってもらったと語っており、戦後になってから綺堂が鳶魚に送った書簡類を受け取っている。また岡本が復員してから青蛙房の前身である青蛙堂書房で出版した第一冊が鳶魚の江戸ばなし『女の生活』であり、戦後の鳶魚の著作はこの一書のみである。青蛙房からは鳶魚の著作が複数出版されており『御殿女中』の「^う附けたり」で岡本は、鳶魚の人柄や晩年の様子について以下のように書いている。

「翁を好むと好まざるとに拘らず、およそ江戸を調べるとすれば、一往は鳶魚本を通過しなければならぬ。翁にしても、もし寛容と忍耐の姿整を保つことができたなら、民間学者として江戸学という一派を形成したに違いない。翁の性格は人を容れなかった。出入りの者は或いは御勘気を蒙り、或いはみずからおん出てしまって、側近寥々たるに至った。(略)最後まで離れなかったわたしは、よっぽどの莫迦か腹黒かということになる。」

かいおんじ ちょうごろう
海音寺 潮五郎

明治 34(1901)年 11 月 5 日～昭和 52(1977)年 12 月 1 日

小説家。鹿児島県伊佐郡大口村（現・伊佐市）生まれ。大正 15 年國学院大学卒業後、中学校の教師になる。昭和 7 年「風雲」が『サンデー毎日』の小説募集に当選、9 年に退職し作家業に専念する。11 年「天正女合戦」「武道伝来記」で直木賞受賞、以降歴史小説・史伝物を中心に幅広く活躍し、43 年菊池寛賞を受賞。48 年には文化功労者に選出される。享年 76。

海音寺が鳶魚と初めて会った時、鳶魚から「あなたの筆名の出典は観音経ですね」と言われ、意味を調べると随分と傲慢な命名だったことを知るが、海音寺自身にそのような意図はなかったと語っている。その後も「矢立会」など鳶魚の主宰する勉強会に参加し、自著でたびたび「鳶魚から聞いた話」をもとに考察や持論を展開している。また鳶魚の唱えた説や書物についても言及し、鳶魚のことは江戸知識についての師であったと語っている。鳶魚が永

眠した山梨県不二ホテルの庭には、鳶魚の十七回忌に地元の人から乞われて書いた海音寺の書で「三田村鳶魚終焉之地」と記された碑が建てられている。

かわたけ しげとし
河竹 繁俊

明治 22(1889)年 6 月 9 日～昭和 42(1967)年 11 月 15 日

演劇研究家。長野県下伊那郡山本村（現・飯田市）生まれ。坪内逍遙の文芸協会付属演劇研究所に入り、明治 44 年坪内のすすめで歌舞伎狂言作者・河竹黙阿弥かわたけもくあみの娘絲女いとじよの養嗣子となる。昭和 3 年の早稲田大学演劇博物館の創設に尽力し、9 年より館長を務める。24 年日本演劇学会を設立、初代会長を務めた。演劇の研究・普及に幅広く活躍し、31 年菊池寛賞を受賞。42 年文化功労者に選出される。享年 78。

鳶魚は河竹にとって江戸学の大先輩で師ともいうべき存在だった。ある時、鳶魚が河竹に「神妙」は“シンビョウ”が正しいのに、近頃は学者先生でさえ“シンミョウ”になってしまったと慨嘆すると、河竹は生前かたくなに“ビョウ”で通し、学生にもそう教えた。また河竹は鳶魚のことを「一見磊落でざっくばらんにみえるが、単純にそう思いこんではしゃぎすぎると、すぐ手紙でもう二度と来てくれるなとピシッと差し止められてしまう、そんな気むずかしい先生」と語っていたが、そんな鳶魚の前では「いつも自分の方が気むずかし屋になってお辞儀の仕方やら座りかたやらにやかましかった」と、河竹の二男で演劇研究家の河竹登志夫が書き残している。

晩年、病床に臥していた鳶魚に河竹が外国製のオルゴールを贈っている。鳶魚はこれをいたく気に入り、見舞い客が来ると「君、これを聴いて見給え。河竹さんが送ってくれたのだ」と言って自らネジをまいて聴かせていた。なお、このオルゴールの入手のために菊池明が奔走したことを、小説家の野沢純が「鳶魚先生終焉記」に書き残している。

鳶魚と文壇批判

鳶魚は当時の大衆作家たちから恐れられていた。それは時代考証という立場から、時代小説を厳しく批評したからである。その批評は昭和8年に『大衆文芸評判記』、14年に『時代小説評判記』としてまとめられ出版された。

この2冊で批評されたのは、島崎藤村の『夜明け前』や、吉川英治の『宮本武蔵』、大佛次郎の『赤穂浪士』など、当時の流行作品ばかりである。例として『宮本武蔵』について書いた一文を抜き出してみる。「これは活字の間違いかもしれないが、「ザス」という場合には「主」の字を書く。しかるに、ここでは「首」になっている。字の書き方さえ知らない。こんなわけのわからない人間が、沢庵のような特別な身分の人を扱おうとするのは、最初から無理な話です」。このように鳶魚は、非常に強い語調で指摘している。また、他の作家についても「こういう無法千万なものを製造する人間があるということに驚く」、「大衆小説に書いてあるような世の中は、何時の世の中にもないでしょう」、「何分読む方が降参しました」などと、にべもない。合格点とされたのは長谷川伸くらいで、他の作家たちは辛らつ極まりなく批評されている。

この2冊の出版は世間に多くの反響を呼んだ。この本を切っ掛けにして、鳶魚に教えを乞おうという人間も出てきた。一方で、当の鳶魚は方々でだいぶ叱られたという。鳶魚と親交のあった作家のささがわりんぶう笹川臨風には「よせばいいのに、お前なんか若い衆の書いたものをけなし、なにが得がある」と言われてしまったようだ。鳶魚自身も後年、その2冊の本は書くべきではなかったと言ったそうである。

しらい きょうじ
白井 喬二

明治22(1889)年9月1日～昭和55(1980)年11月9日

小説家。神奈川県横浜市生まれ。大学卒業後、雑誌編集者や化粧品会社の文書課長などを務めるが退職。時代ものの大衆小説を執筆し、大正9年『講談雑誌』に「怪建築十二段返し」が掲載される。14年、大衆小説家の親睦団体である二十一日会を結成する。15年に中野に転居、またこの頃大衆文学系同人誌『大衆文芸』を発刊し、大衆文学運動の指導者として活躍する。代表作に『富士に立つ影』『新撰組』などがある。享年91。

昭和8年、鳶魚は『大衆文芸批評記』で「富士に立つ影」を辛らつに批評し、日記にも「口授のため『富士に立つ影』をよむウンザリなり」などと書き残している。しかし、その後も白井が隠密について調べたいという人物を鳶魚に紹介したり、鳶魚が戦時中に白井を訪ねたりと、交流自体は続いていたようだ。白井はこの時の鳶魚の来訪について自伝『さらば富士に立つ影』に書き残している。鳶魚が訪れたのは、折しも学徒出陣が発表され2人の子息が矢継ぎ早に召集される、そんな時分であった。白井は当時の日記帳を振り返り「江戸研究家の三田村鳶魚の来訪をうけたことがしるしてある。(略) 鳶魚は古実にやかましい人で作品の中から欠点を見つけて槍玉にあげた。ぼくもやられている。鳶魚はむろんぼくより長老で、戦争はものかは、この日も、口をついて出る言葉は江戸の風物だった。でも大いに気が休まった。ぼくが鳶魚の初期に出した『江戸生活』という雑誌を読んでいたので上機嫌であった」と回想している。

はじ せいじ 土師 清二

明治26(1893)年9月14日～昭和52(1977)年2月4日

小説家・俳人。岡山県邑久郡国府村(現・瀬戸内市)生まれ。中国民報の記者などを経て、大正8年大阪朝日新聞社に入社。『週刊朝日』の前身となる『旬刊朝日』の創刊に携わる。編集職の傍ら、「水野十郎左衛門」を連載。15年、退職して専業作家となった。長谷川伸らと共に「しんようかい新鷹会」を設立し、後進の育成にも尽力した。代表作に『砂絵呪縛』、『風雪の人』など。享年83。

鳶魚とは大阪朝日新聞社勤務時代から作家と編集者として関わりがあったが、面識は全く無かった。後に作家になると、土師の作品も鳶魚の大衆文芸批評の的となり、「土師さんは、一番とって、いいか知れないけれども、思いきってむちゃなことをやってのける人で、大衆小説の中でも、向う見ずなことをする」と評された。鳶魚の厳しい評に対して、土師は当初「アンチクショーじじい」と思っていたそうだが、後に矢立会にて初めて対面すると「たいへんいいじいさん」であったと語っている。

そんな土師であったが、鳶魚に会う前から著作を40冊は持っていたと語っており、作品を書く上で多大な影響を受けたことが分かる。

鳶魚が尊敬した人

つぼうち しょうよう
坪内 逍遙

安政 6(1859)年 5 月 22 日～昭和 10(1935)年 2 月 28 日



▲ 坪内逍遙

出典：『国史肖像大成』（国立国会
図書館近代日本人の肖像 より）

小説家・評論家・劇作家・翻訳家・教育家。美濃国加茂郡太田村（現・岐阜県美濃加茂市）生まれ。東京大学政治経済科卒業。明治 16 年東京専門学校（現・早稲田大学）の講師となる。18 年から小説『当世書生気質』や小説論『小説神髓』を刊行。小説改良の呼びかけとなり、近代日本文学の成立に大きな影響を及ぼした。23 年専門学校に文学科（文学部）を創設し、24 年には文芸雑誌『早稲田文学』を創刊。大正 4 年に早稲田大学教授を辞職し、以後文筆に専念。昭和 3 年古希を記念して早稲田大学構内に坪内博士記念演劇博物館が建てられた。享年 75。

鳶魚は、坪内の側近山田清作の弟益次と学友で、彼に仕事を世話したことがあった。そのことに恩義を感じた山田の紹介によって、鳶魚と坪内は面識を持つこととなった。大正 6 年、『近世実録全書』刊行のため呼ばれた会合で初めて顔を合わせて以降、二人の親交は坪内が亡くなるまで続いた。

鳶魚は演劇文芸に関して坪内に指導を受けるなどし、周りから「坪内逍遙崇拜者」と言われるほど坪内に傾倒していた。坪内も鳶魚の研究や江戸に関する知識を認めており、自身の研究や創作のための資料を鳶魚に求めることが多くあったと云う。また、鳶魚の著作の序文もいくつか執筆しており、二人の間には双方向な関係が築かれていたことが窺える。

鳶魚は坪内の人柄について、「恐ろしく注意の細かいことは、作物のみならず、日常の万事に行きわたって」おり、そして「何んとしても條理の通らない事は気が済まない、苦しくて悲しくても、正しくなければ已まないといふ処があった」と語っている。

みなかた くまぐす
南方 熊楠

慶応3(1867)年4月15日～昭和16(1941)年12月29日

生物学者・博物学者・人類学者・民俗学者。紀伊国和歌山（現・和歌山県和歌山市）生まれ。和歌山中学時代に博物学者の鳥山啓に師事する。卒業後上京、共立学校を経て、大学予備門に入るが学業よりも土器の採集や菌類の採集に没頭し、落第を機に中退する。明治19年、渡米しミシガン州立農学校などに学ぶ。24年、「ピストル1挺、書籍若干、顕微鏡二台」を抱えてフロリダからキューバへ向かい、独学で各種の標本や地衣類、菌類の採集に努める。25年渡英、大英博物館東洋書籍部に出入りし、『大英博物館日本書籍目録』の編纂に協力した。また、自然科学誌『Nature』、総合学術雑誌『Notes and Queries』を中心に多数の論文を発表した。33年帰国、勝浦・那智など熊野の地で隠花、顕花植物、菌類の採集と分類整理に没頭。37年より和歌山県田辺に居を定め、以後生物学・博物学・仏教・民俗学・天文学・考古学・風俗など広範な分野で研究と著述を行い、『人類学雑誌』『植物学雑誌』『太陽』などに寄稿した。特に変形菌類の分野では世界的な研究者として知られ、数度にわたって変形菌の目録を発表、新種を発見するとともに、当時約20種しか記録されていなかった日本の変形菌を、200種近くにまで増やした。傍ら、39年神社合祀令が發布されると、合祀によって神社林が伐採され貴重な樹木や菌類が絶滅するのを憂い、日本における自然保護運動の先駆けともいえる神社合祀反対運動を展開、こうして守られた境内や神社林は今もその姿を残し、後年熊野古道が世界遺産に登録される契機をつくった。南方の学問は一つの分野に関連するすべての事項を追求するといった莫大なものであり、そこから形成された途方もない知識の網は“南方マンダラ”と評された。生涯、在野を通じたため、その業績は生前に明らかにされなかったものも多かった。享年74。



▲ 南方熊楠

南方熊楠顕彰館（田辺市）：所蔵

南方は鳶魚の主宰していた雑誌『彗星』などに誌上参加という型で登場している。これは鳶魚を中心にさまざまな江戸研究者が参加した勉強会の筆記録を毎月雑誌に掲載しており、その参加者の言や本文への校註で気づいたことがあれば読者が投稿できるようになっていたため、このときの南方の投稿は『南方熊楠全集』に『日本人及日本人』『彗星』の雑誌論考として、また雑誌に載らなかったものは「三田村玄龍（鳶魚）宛書簡」として収録されている。そんな南方と鳶魚の二人が直接会ったのは生涯で二度のみであったが、その時の様子は双方の日記に書き残されている。南方は「上京日記」で鳶魚のことを「この人江戸の文学に精通し、軟文学についての著述多きこと世の^{あまね} 洽く知るところたり」と好意的に紹介しており、鳶魚の日記では南方の人物評が書かれているが、これは鳶魚の日記の中では稀な長さで、南方が鳶魚に強烈な印象を与えたことが窺える。また鳶魚の著書『明治大正人物月旦：三田村鳶魚遺稿』にも南方についての記述があり、ここでは南方の学術的な評価とは別に、その豪放な人柄について妻との離縁騒動などを交えて記している。そして昭和16年、新聞で南方の訃報を知った鳶魚は、日記に「手紙の交通は二十年余りしも、相逢ふことは先年入京の二回のみ、（略）物識^{ものしり}ゆゑ幾つにしても惜しきことなり」と綴り、その2年後に出版された『江戸ばなし』其二「目明しの話」でも、「目明しの名義について、故南方熊楠翁から教えられたことがあります（略）よくいろいろと何でも知っている人でした。」と書いている。

早稲田大学演劇博物館 ～逍遙先生のおそばに～

鳶魚の旧蔵書は、「逍遙先生のおそばに置いて欲しい」という鳶魚の遺言によって早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に収められている。

鳶魚の旧蔵書からなる「三田村文庫」は、約2500点の資料群。内容は、風俗、宗教、芸能関係の図書その他、晩年に手掛けていた『江戸語彙』の原稿、明治30年代から晩年に至るまでの研究手控えノート『含苞』^{がんぼう}191冊が含まれている。『含苞』は、そのほとんどが資料の抜き書きからなる鳶魚の備忘録で、鳶魚江戸学の一端に触れることができる。

演劇博物館には三田村文庫の所蔵資料以外にも、逍遙から鳶魚に宛てた書簡が保存されている。この書簡は逍遙没後に鳶魚が寄贈したもので、逍遙夫人が鳶魚に贈ったという菓子折に入れ、自ら箱書きして持参したという。

また、鳶魚は早稲田大学とも少なからず因縁がある。明治22年の来島恒喜^{くるしまつねき}による大隈重信への爆弾襲撃事件時、来島に合図を送ったのが鳶魚だった。鳶魚は逮捕されるが、大隈が前途のある若者だから許してやれと言ったことで釈放されたという。このことが鳶魚の早稲田最員につながる。

演劇博物館では、三田村文庫並びに三田村鳶魚に関して集中的なプロジェクトを実施し、2008年にはその成果を発表している。不二ホテルに残っていた原稿を翻刻出版した『明治大正人物月旦』はこのプロジェクトによるもの。これにより鳶魚最晩年の著作は日の目を見たのである。国内随一の鳶魚コレクションである三田村文庫は、現在、貴重書資料として演劇博物館において閲覧することができる。



▲ 早稲田大学演劇博物館外観

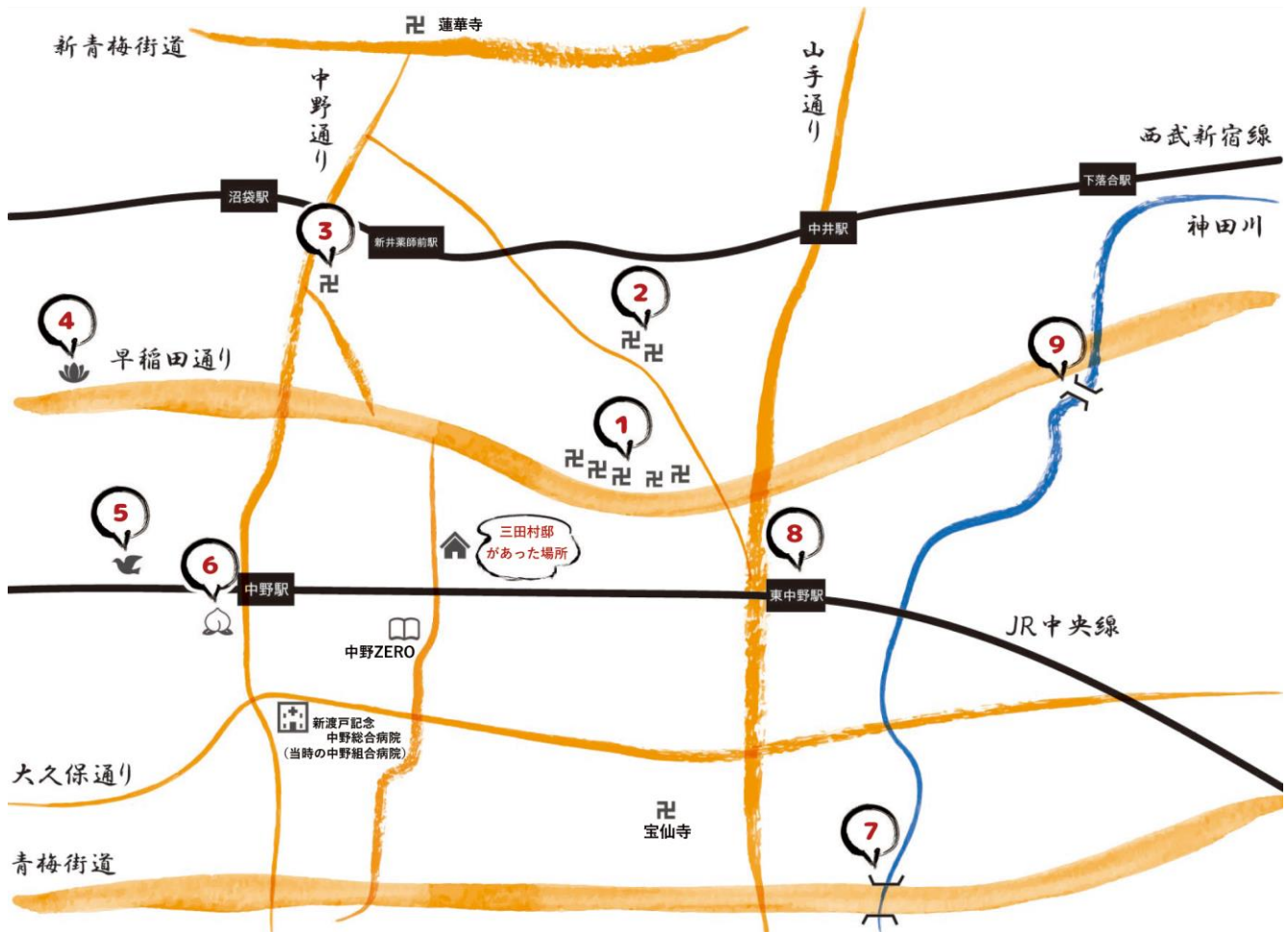
早稲田大学演劇博物館：提供

鳶魚が歩いた中野

鳶魚の日記には、訪ねた場所や人、読書、執筆、来客などが日々記録され、時には庭の様子や町の情景、世間の動きなどが綴られる。

『三田村鳶魚全集』（全 28 巻, 中央公論社）に収録されている日記及び早稲田大学演劇博物館所蔵の日記に関する資料を主に参照し、中野における鳶魚の足跡を辿ってみる。

※ 令和 4（2022）年 3 月現在の地図を基に作成しています。



三田村邸があった場所
周辺の現在の様子 ▶



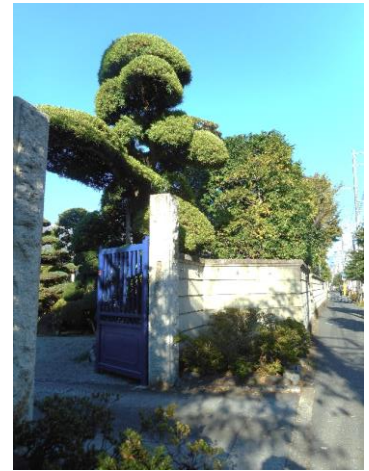
1 昭和通り（現・早稲田通り）の寺町

現在の上高田1丁目、早稲田通り北側に並ぶ寺院。この周辺の寺院は明治・大正時代に浅草・牛込・赤坂などの都心から移転してきたものが多い。

鳶魚は以前から墓や書物の調査等でこの辺りを訪れていた。中野に住み始めた当初は龍興寺^{りゅうこうじ}に寄寓。その後も日常的に住職たちと親しく交流していた様子が窺える。



▲ 松源寺（通称さる寺）



▲ 龍興寺

2 萬昌院

現在の上高田4丁目にある曹洞宗の寺院。昭和23年に功運寺と合併し、現在は「萬昌院功運寺」となっている。

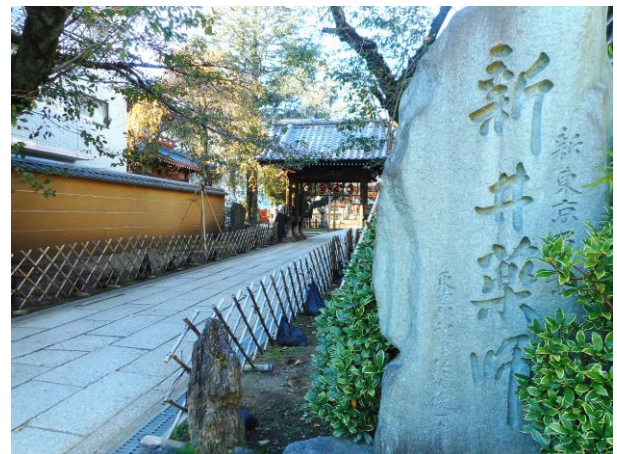
鳶魚は昭和13年4月に牡丹を觀に訪れ、「やがては当所名物にもなるべきか」と日記に記している。



▲ 現在の萬昌院功運寺

3 新井薬師周辺

正月の参詣に始まり、月夜の散歩、線香を買いに、と度々訪れた場所。薬師の前面の家へ按摩を受けに行ったことや、裏手の映画館へお手伝いさんを連れて行った記録のほか、大正9年8月の日記には「此辺は一月おくれの盆会にて、門火を焚く家々燈籠数多く備へられる、地藏堂田舎びて趣あり」といった町の様子も描かれている。



▲ 現在の新井薬師

4 いちくかい 一九会道場

大正11年から昭和39年頃まで、現在の野方1丁目にあった修行道場。鳶魚が以前、牛込区市谷河田町（現・新宿区河田町）にあった禊教会へ通っていたつながりが創立の切っ掛けとなったという。青年有志の熱意によって道場が建設され、当初は毎月19日、鳶魚の親友の小倉鉄樹（山岡鉄舟の高弟）指導の下、神道みそぎや座禅による修行が行われた。鳶魚の日記を見ると、例会や座禅、提唱など、この道場へ足繁く通っていた様子が記録されている。

5 軍用鳩調査委員事務所

現在の四季の森公園南側辺り。陸軍電信連隊の基地内にあった施設。当時は情報通信技術向上の一環で「軍用伝書鳩」の開発が行われ、国内で重要な役割を果たしていた。

鳶魚の親戚、井崎中尉が軍用鳩養成所の主任をしていた関係で、上野・吉祥院寄宿時代の学友、山田益次を紹介し就職を斡旋したというエピソードが残っている。



▲ 軍用鳩調査委員事務所 正門
(東京中野雑色 金谷写真館発行)

6 桃光倶楽部

大正時代半ば、地元の有志が出資し建てられた施設。落語、講談、浪曲などの貸席として利用された。私設市場、集会所と姿を変え、現在は桃園会館となって地域の人々に利用されている。

鳶魚は大正12年11月、妻の八重と共に松林伯知と桃川如燕の講釈を聞きに訪れ、「中野の寄席行は初めて也」と日記に記している。



▲ 現在の桃園会館

7 淀橋

神田川に架かる青梅街道の橋で、中野と新宿の区境にある。大正10年、青梅街道を西武電車（後の都電）が走るようになり、大正13年に現在の橋が架けられた。

鳶魚は大正13年12月に四谷へ散策した際、この橋を通り「中野淀橋間は一昨年頃と同様なり、淀橋新宿間は繁昌、道路改修され街燈煌々たり」と日記に記している。

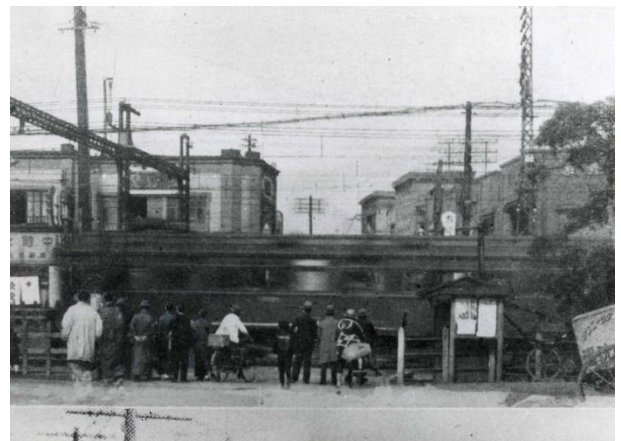


▲ 現在の淀橋

8 東中野駅周辺

明治39年に柏木停車場として開設された後、大正6年に東中野駅と改称された。

鳶魚の日記には、後に「モナミ」（第16回中野区ゆかりの著作者紹介展示「幻のモナミ」参照）となる建物に住む木部一枝氏に会いに行った記録が残る。この時は不在で会えず、後日散策中にばったり会い閑談したと記している。



▲ 昭和初期 東中野駅付近
中央線の開かずの踏切

9 おたきばし 小滝橋

中野長者の伝説に因み「姿見橋」、「面影橋」とも呼ばれた。

鳶魚は大正13年12月、当時の高田馬場停車場までの間を散策した際この橋を通り、「3、4年前には夜間往来も稀なりし所なれど、今は行歩も明るく、下町通りの如し」と周辺の様子を記している。



▲ 現在の小滝橋

鳶魚終焉の地

不二ホテル

鳶魚は最晩年の約1年3か月、山梨県・下部温泉から少し離れた湯沢温泉郷にある不二ホテルで過ごした。

鳶魚が初めて不二ホテルを訪れたのは、昭和20年の疎開時。この疎開中、不二ホテルの主人・高野忠男氏の長男で文学青年であった六衛^{むつえ}氏と親しくなる。六衛氏は心底から鳶魚に師事していたという。そして数年後、夫人を亡くし、身の回りの世話をする身内もない鳶魚の様子を見かねた六衛氏はある決断をする。



▲ 現在の不二ホテル。中央右寄りに碑が見える。

今回、当時を知る不二ホテルの高野弥生さんからお話を伺った。

不二ホテル：提供

「兄（六衛氏）は文学をやっていたので、先生とは親しくしていました。兄が先生の奥様の葬式に行った際、先生から「俺をどうしても（不二ホテルへ）連れていけ」と言われたそうです。不二ホテルを気に入っていたのですね。それで兄は私たち家族に何も知らせないまま、先生を背負って連れてきたのです。」

当時、弥生さんは高校生。女中さんが忙しい時には弥生さんが代わりに鳶魚のお世話をしたという。

「ほとんど寝たきりでしたが、明るくユーモアを交えて話をする面白い人、という印象ですね。気に入らないことがあると物を投げたりもしましたが、怖いと感じたことはなかったですよ。」

鳶魚と過ごした日々を“どれも楽しい思い出”と語る弥生さん。鳶魚に「お経くらい読め

なくてはだめだ」と言われ、枕元で読まされた般若心経は今でも毎朝唱えているという。

不二ホテルは建替えられ、鳶魚が滞在していた部屋はもうない。しかし、庭にある「三田村鳶魚終焉之地」の碑がこの地との縁を繋いでいる。

鳶魚の墓

鳶魚の墓地がある長光山本立寺（東京都八王子市）は日蓮宗の古刹。その一面には八王子千人同心の千人頭であった原胤敦（1749-1827）の墓があり都指定の旧跡となっている。

三田村家の墓地には十数個の古い墓石が置かれ、正面のやや新しい墓石に鳶魚と妻八重の戒名が刻まれる。三田村家の歴史については、鳶魚が最晩年に遺した回顧録「法華三昧」（『三田村鳶魚全集』第27巻所収）に詳しい。



▶ 「巖王院殿鳶魚玄龍開士」の戒名が刻まれる鳶魚の墓石

年表

年（西暦）	年齢	出来事
明治3（1870）年	0歳	旧暦3月15日（新暦では5月4日）、武州八王子大横68番地（現・東京都八王子市）に生まれる。本名玄龍。 三田村善平とタキの二男だが、兄が秋に亡くなり、一人っ子として育つ。
	幼児期	婿養子の父が母と離別。母方の祖父甚兵衛とも、彼の放蕩がもとで別居。 祖母、母とともに東京に移住し、5、6歳ごろまで神田岩本町に住む。
明治9（1876）年	小学生時代	下谷の松前小学校（現・台東区立台東育英小学校）に通う。 学校の近くに住んでいた吉田吉五郎（後の吉田書店店主）とこの頃知り合う。
明治20（1887）年	17歳	当時の自由民権思想に共鳴、政治運動に挺身する。 保安条例により横浜に移り、祖母の旧僕の旅館に身を寄せる。
	時期不詳	東京仏学校（現・法政大学）に学ぶ。
明治22（1889）年	19歳	来島恒喜による大隈重信襲撃事件に関わり、収監される。
	時期不詳	島田蕃根（南村）に師事する。
明治27（1894）年	24歳	八王子で新聞『桑のみやこ』を発刊。玄龍名で主筆となるが、7月に日清戦争が勃発すると、『中外商業新報』の記者として従軍した。
明治28（1895）年	25歳	従軍中に祖母死去。 終戦帰国後、上野吉祥院住職大照円朗に従って得度受戒、天台宗に僧籍を得る。
明治34（1901）年	31歳	祖父甚兵衛、75歳で死去。 このころ「捉雲」の筆名を使い、読売新聞等で書く。
		このころ、人の紹介で山梨日日新聞記者となり山梨の新聞社を転々とする。 甲府に在住。
明治38（1905）年	35歳	「甲斐方言考」を玄龍の名で『風俗画報』に連載。
明治39（1906）年	36歳	「烈士喜剣とは何ぞ」を政教社の雑誌『日本及日本人』に掲載。 以後同社及び同誌とは生涯に渡る付き合いとなる。
明治40（1907）年	37歳	報知新聞名古屋支局長を務めるが、誤電が名古屋銀行の取り付け騒ぎに発展して、支配人だった杉野喜精が辞職。鳶魚も責任を取って報知新聞を辞職する。
明治41（1908）年	38歳	上京し現在の新宿区に住む。母を家に迎える。

※中野の記述は主だった部分のみ抜粋し、適宜補い、現代語にしています。

中野に関する記述

年（西暦）	年齢	出来事
明治43（1910）年	40歳	「三十三間堂棟木の由来」を鳶魚の筆名で『日本及日本人』に掲載。 処女作『元禄快拳別録』を啓成社より出版。
明治44（1911）年	41歳	『芝居と史実』を政教社より出版。 藤本あさと内祝言を行うが、2日後離別を決定、6日後に里へ返す。
明治45・大正元（1912）年	42歳	糖尿病の診断を受ける。
大正2（1913）年	43歳	福井県の高松八重（明治17年生まれ）と結婚。妻の妹の操（明治29年生まれ）も同居する。高松家は新宿区に引っ越し、親しく往来する。 『江戸の珍物』を聚精堂より出版。
大正3（1914）年	44歳	政教社社員として名が列挙されている。 『列侯深秘録』（編集校訂）を国書刊行会より出版。
大正4（1915）年	45歳	『雑芸叢書』全2冊、『信仰叢書』（いずれも編集校訂）を国書刊行会より出版。 当時の社会問題であった乃木家再興問題について盛んに活動。
大正5（1916）年	46歳	『近世仏教集説』、『鼠璞十種』全2冊（いずれも編集校訂）を国書刊行会より出版。
大正6（1917）年	47歳	輪講を始め、まとまると出版していくようになる。昭和24年まで52作品を取り上げた。 坪内逍遙と初対面。以後深く敬愛する。
大正7（1918）年	48歳	監修・顧問を務めた『近世実録全書』（全20巻）が早稲田大学出版部から刊行開始。 11月9日 母タキ、71歳で死去。
大正8（1919）年	49歳	
大正9（1920）年	50歳	『芝居うらおもて』を玄文社より出版。 中野に転居。 人類学会の出店的な同好会、集古会に出席し始め、多くの趣味人と交流を深める。 柴田宵曲による口述筆記が始まる。
大正10（1921）年	51歳	『大名生活の内秘』を早稲田大学出版部より出版。来島恒喜の妹の夫に聞いた「お由羅騒動」の話を収める。 『足の向く儘』を国史講習会から出版。

中野に関する記述

4月21日 中野町打越（現・上高田）の保善寺を訪れる。鳶魚は明治40年までの地名「中野村」と書いている。

10月3日 宝仙寺に行く。
10月27日 龍興寺に飯塚染子（柳沢吉保の側室）の墓を探しに行く。

4月25日 「宝泉寺に至る、富田教敦氏あらず」。同29日には宝仙寺の住職である「富田敦純氏」を訪ねている。「宝仙寺の富田敦純氏」の誤記か。

1月13日 相馬事件で有名な西山隆（リウ）が亡くなり、16日に野方村宝泉寺に葬られる予定であることを記載する。

10月15日 来客の中に龍興寺住持天野義春の名前あり。

2月2・22日 「お客、天野義春氏」。この後、度々「春老」と登場するのも同一人物か。交友は天野氏が亡くなるまで続いている。

8月3日 10年余飼った犬の「エス」が死亡。龍興寺に頼んで埋めてもらった様子。

12月9日 母が亡くなって一ヶ月後、龍興寺禅磨師が果物一籠を持ってきて、読経する。

住所録に中野町の長谷川万次郎が登場する。長谷川如是閑のことで、画家、大野静方の兄に当たる。鳶魚は小字を「東中野町」と書いているが、東中野が正式に地名になるのは戦後の住居表示実施時のことである。

3月25日 当時の住所で大字中野2104番地1号に160坪の土地を借り入れる。

8月3日 龍興寺に移る。

8月8日 河竹繁俊が、彼の義理の祖父に当たる河竹黙阿弥の墓が源通寺にあるという話をする。

8月9日 夜中野町まで散策すると、お囃子の稽古の音が聞こえてくる。「田舎らしき様子心地よし」

8月13・21日 夜、新井薬師まで散策。

12月10日 中野2104番地に転居。

1月7日 拾って家に連れ帰った犬二匹が、10日の明け方、狐に食い殺される。

1月21日 宝仙寺で借地の相談をする。住職の富田敦純が不在だったので託して帰る。

年（西暦）	年齢	出来事
大正11（1922）年	52歳	読売新聞に「江戸の思ひ出、上野と浅草」を連載し、崇文堂から出版。 『裏面探訊 江戸趣味之研究』を国史講習会より、『其角研究』をアルス社より出版。 義妹の操が皆川豊治と結婚して家を出る。 公刊物ではじめて「翁」と呼ばれる。
大正12（1923）年	53歳	9月1日 関東大震災。当日の日記は無いが、翌日から連日長文がつづられている。 下谷で店舗と家が全焼した吉田書店一家を12月半ばまで近所に引き取る。 店主の孫の書いた『古書肆「したよし」の記』に詳しい。 『お大名の話』を雄山閣より出版。
大正13（1924）年	54歳	『近松の心中物 自由恋愛の復活』を崇文堂から出版。 『お江戸の話』『公方様の話』を雄山閣から出版。
大正14（1925）年	55歳	『鳶魚随筆』『鳶魚劇談』『芝と上野浅草』を春陽堂から出版。 『娯楽の江戸』を恵風館から出版。
大正15・昭和元（1926）年	56歳	自宅で江戸文学輪講会をはじめ、機関誌『彗星』を発刊。 『江戸の噂』『瓦版はやり唄』を春陽堂から、『芝居ばなし』第一編を宝文館から出版。 『瓦版はやり唄』は発売禁止になりかけたため、一部を削除した。
昭和2（1927）年	57歳	江戸の未翻刻写本から編纂した『未刊随筆百種』（全23巻）を米山堂から刊行開始。 『江戸年中行事』『江戸雑話』を春陽堂、『芝居ばなし』第二編を宝文館から出版。 岡本綺堂が鳶魚の文章から脚色した戯曲「相馬の金さん」を発表。

中野に関する記述

- 3月 平林寺で知り合った親友小倉鉄樹（山岡鉄舟の高弟、晩年に画家の小倉遊亀と結婚）の指導する一九会道場が、野方村に完成。鳶魚も度々出入りする。
- 5月15日 庭を隔てて向かいの家の新婚の妻が硫酸をラムネと誤飲。
- 7月30日 この日まで3日間大阪朝日新聞が不着、29日に中野郵便局長に葉書で申告し、この日配達人にも話す。翌月3日には正常に復している。

- 9月2日 小石川の知り合いが米が売っていないとやってきたので、中野の取り付けの米屋から玄米三俵を融通する。停電しており、蝋燭の火で夜を過ごす。
- 4日 中央線復旧。行商が一人来るが、土地の御用聞きは一人も来ない。
- 6日 近隣の電気が復旧するが、三田村家含む四軒が取り残され、翌日点灯する。
- 10日 「打越の通りを見るに、往来の人にて羽織着たるはなく、髪結へる女もなし。」
- 11日 「近隣浴場、三所開業。近き往来にて白粉付けたる女一人見かけたり」
- 19日 「今朝より頻繁に電車往来す」
- 20日 中野町の各小学校は本日より授業を始める。前に9日より授業開始と貼紙がしてあったが、当分授業はせず追って開始日を知らせるといふことになり、後に本日よりとしてこれを実行したものである。
- 11月27日 夜、桃光倶楽部（現・桃園会館）にて妻とともに松林伯知、桃川如燕の講釈を聞く。中野の寄席行ははじめて。

[この年、野方村が野方町になる。]

- 2月4日 電信隊正門前に住む、春陽堂の雑誌『新小説』の齋藤新太郎（※後日の日記では竜太郎）氏が来て原稿依頼、来月10日までにと約束する。翌月10日原稿を渡しに行くが不在のため、春陽堂書店に郵送。
- 26日 近所の家より失火。火を出した18歳の下女は、過失に驚き鉄道自殺したという。
- 11月13日 千光前の森本千之助氏のところで、痔の処方箋をもらう。
- 28日 「両中野沿線居住者小集の計画につき発起人たるよし依頼あり。」顛末不明。
- 12月5日 夜中野に出て新宿まで散歩、中野淀橋間は一昨年頃と同様、淀橋新宿間は目覚ましく繁盛している。

- 5月21日 午後 駅で、東中野に住んでいた作家、近松秋江に会う。同道していた佐々木味津三夫妻とは初対面。後に『大衆文学評判記』に佐々木の『旗本退屈男』を取り上げることになるが、この時の日記では「元氣よき若者なり」とし好印象。
- 7月24日 「中野には近年まで螢多かりしという、今日は珍しく見るほどなり。」
- 10月3日 「散策、江古田、蓮華寺、新井薬師」
- 12月16日 夜 電信隊（現・中野サンプラザ付近）にて関の聲がしきりに起こる。「湖北に出征するなるべし」。

- 6月27日 谷戸に内田周平（号・遠湖、中国哲学者）が越してくる。慶応大学で内田に教わった奥野信太郎には、鳶魚は内田の「親友」と書かれている。

- 12月4日 桃園小学校（現・中野第一小学校）職員のため、東京市主事から講演を依頼されるが断る。

年（西暦）	年齢	出来事
昭和3（1928）年	58歳	『芝居風俗』を宝文館から出版。 『柳沢・越後・黒田・加賀・伊達・秋田 騒動実記』を博文館から出版。 第一回普通選挙があるが投票せず。若い頃の政治への情熱は消えたようだ。 早稲田大学演劇博物館が開館し、開館式に出席する。
昭和4（1929）年	59歳	『江戸時代のさまざま』を博文館から出版。
昭和5（1930）年	60歳	村山ませ子から数年かけて聞き書きした『御殿女中』を春陽堂から出版。 『江戸生活のうらおもて』『横から見た赤穂義士』を民友社から出版。
昭和7（1932）年	62歳	『日本及日本人』に「大衆文芸評判記」を連載。時の流行作家の作品を片端から批判して物議をかもす。 朝鮮旅行で、義妹の皆川夫妻と再会する。
昭和8（1933）年	63歳	『江戸ッ子』『江戸の白浪』『御家騒動』を早稲田大学出版部から出版。 『大衆文芸評判記』を汎文社から出版。
昭和9（1934）年	64歳	『捕物の話』『江戸の女』を早稲田大学出版部から出版。
昭和11（1936）年	66歳	『滑稽本名作集』を講談社から、『江戸の実話』を政教社から出版。 この年から輪講がなくなる。
昭和12（1937）年	67歳	大衆作家らを集めた満月会開始。海音寺潮五郎らと親しくなる。
昭和13（1938）年	68歳	満月会機関誌として『江戸読本』発刊。鳶魚が巻頭言を掲げ、以後小論考や「江戸語彙」を掲載。
昭和14（1939）年	69歳	『時代小説評判記』を梧桐書院から、『江戸百話』を大日社から出版。 3月に出そうとしていた『江戸読本』が禁売となるが、理由はわからず。
昭和15（1940）年	70歳	警視庁が輪講の差止を命じたと人に聞いて、止めた様子。 『江戸読本』廃刊の申し出が作家側からあり、これを機に満月会も活動を縮小する。

中野に関する記述

- 3月9日 午前3時近所に火事あり。大分焼けた様子。
12月14日 画家田中咄哉（後に以知庵）の打越のアトリエで、結城孫三郎一座の糸繰人形と、写し絵の上演があり、妻ら連れて見物する。

- 5月19日 「牧野一馬、中野町会議員候補者になりとて来る。」
6月20日 代々木に柳沢保承（後の伯爵）を訪ねると、木部一枝氏（東中野駅前、中野区ゆかりの著作者紹介展示16回「幻のモナミ」参照）に会うべきと言われ、その日は不在だったため、7月11日木部氏と懇談する。用件は書かれていない。
8月17日 「散歩に出て木部一枝氏に逢ひ、伴ひ帰り閑談数刻。」

- 9月 近松秋江、『水野越前守』を書くため、翌年にかけて相談に来る。
10月24日 龍興寺座禅会発会。妻と伊藤鉄樹とともに参加。24、25日が定例となったらしく、以後基本的に毎月参加している。

[この年、中野区域が豊多摩郡から東京市になる。中野町と野方町が合併し、中野区誕生。]

- 4月24日 龍興寺へ来るはずの人に会いに、米山堂の山田清作の母の告別式の帰りに立ち寄るが、松源寺にいと聞いてそちらへ回る。

- 7月22日 雷が甚だしく、野方で三人死に、千光前（現・中野2丁目）では火事になる。

- 3月27日 小滝町の藤堂伯爵家（現・東中野5丁目）に行き、伯及び夫人に面会し、真田家の奥向に勤めていた竹内かねの昔話を聞く。後に『御殿女中続考』に収録。

- 5月15日 中野警察の堀内清木という人が来話。用件は書いていない。
6月17日 大和町の深津彬氏を訪ね、丹羽家系図の写しを頼む。23日に届き、30日に返送。これは『教化と江戸文学』につながる。

- 7月19日 夕方 組合病院（現・新渡戸記念中野総合病院）で、心学団体の舎主山田敬斎の心学道話があり、聞きに行く。

- 3月29日 久々に内田遠湖の元を訪れ、新刊をもらう。
4月29日 萬昌院の牡丹を見に行く。「やがては当所名物にもなるべきか。」
9月6日 留守中に内田遠湖が来たので、内田宅を訪ねる。前月内田が出した『乃木家襲爵事件の回顧』が2ページの削除を命じられたが、理由がわからないという用件。

- 5月7日 ラジオ出演のため、指示により中野駅まで行くが迎えの車が手違いで来ておらず、大変遅れて危うく間に合わない所だった。
5月7日 中野静坐会に行く。静坐会とある記述はほかにあるが、中野と書いてあるのはこの回だけであり、全て同じ会を指すか不明。
12月28日 野方の市場にて「づき足袋」を売っている。65年くらい前に見て以来はじめて見る。「スフ（※レーヨンのこと）の祟おそろし」。

- 1月23日 道を広げるため、向かいの岸本大将宅の生け垣を毀し、桜を切る。この桜は畑の中にあったものが買い取られて、今日まで21年ほど住宅の春を飾ったもの。
5月18日 松源寺で、ロンドン海軍軍縮条約に反対し自刃したとされる草刈少佐の十年法要が行われると政教社より通知があり、翌日参加。

年（西暦）	年齢	出来事
昭和16（1941）年	71歳	『江戸の風俗』『江戸の生活』を大東出版社から出版。翌々年にかけて出版が多い。 鳶魚当人の分析するには、用紙の統制により大部数の印刷が困難になったため出版社の方針が変わり、少部数のいつまでも売れるものを発行しようとした結果、久しく顧みられなかった鳶魚などに話を持ってくるように至ったということ。
昭和17（1942）年	72歳	『鳶魚縦筆』を櫻井書店、『教化と江戸文学』『江戸ばなし』其一を大東出版社、『玉川上水の建設者 安松金右衛門』を電通出版部から出版。
昭和18（1943）年	73歳	『江戸の流行ッ子』を良国民社から、『江戸ばなし』其二を大東出版社から出版。 奥野信太郎の紹介で、小川恭一が出入りするようになる。 自宅にはお手伝いさんが二人いるのが基本だったが、元々入れ替わりの多かったところ、遂に一人もいなくなってしまう。
昭和19（1944）年	74歳	家売ることを考え始める。 大野静方が亡くなり、政教社の追悼座談会に出席する。
昭和20（1945）年		昨年の収入は皆無の旨、淀橋税務署に申告。
	山梨疎開 75歳	4月に山梨県の不二ホテルへ疎開し終戦を迎える。 この地で野沢純、井伏鱒二と知り合う。
	再度中野	11月末、中野に帰る。 12月には、旧知の山田敬斎に家を売却したものと思われる。
昭和21（1946）年	76歳	中野を去り、埼玉県入間郡豊岡町の、母方の親戚に当たる増田氏別宅に住む。 旧知の平林寺に寄寓。 小金井の笹本寅宅に寄寓。 この頃の日記が残っていないため、詳細不明。
昭和22（1947）年	77歳	世田谷区で義妹の皆川一家と同居するようになる。
昭和23（1948）年	78歳	『女の生活』を岡本経一が興した青蛙堂書房から出版。 翌年にかけて、輪講『懷硯』を行う。 義妹の夫の皆川豊治が急死。
昭和24（1949）年	79歳	4月、矢立会発表会。翌年9月まで、毎月28日に各作家宅でテーマについて講演。 編集解題を担当した『竹の屋劇評』が朝日新聞社から出版。

中野に関する記述

1月2日 前日、遊びに来ていた妻の姪相手に十余年ぶりに花札をし、大負けする。その約束でパンを買いに行く。薬師の脇の菓子屋が二店閉店しており、中野駅近辺の菓子屋にはパンはなく、カステラを買う。

6月 鷺宮に住む多田雄三に著作の表紙を描いてもらう。

9月3日 お向かいの大將が逝去され弔問。昭和15年に出てくる「向かいの岸本大將」と同一人物と思われる。

[この年、東京市が東京都になり、東京都中野区が誕生。]

2月2日 散歩に出かけ、薬師の前面の按摩の家で揉んでもらう。

4月20日 散歩に出て長谷川如是閑を訪ね閑談。

5月12日 お手伝いさんを連れて薬師裏の映画見物。

9月11日 午後7時、特別操縦見習士官の入営あり。天神社前に近所の人々が集っていたので行く。

6月28日 緊急招集があり町会長の家に行く。中野区公吏の疎開談を聞く。

8月1日 8年住んでいた隣人が、転住するため引き払う。

10月 松源寺に頼んで、小川恭一を寄宿させてもらう。

2月28日 中野駅西口の道路を止め、家屋を撤去している。

3月14日 人形町から隣家に親族が避難している。東京大空襲の罹災者の荷車、リヤカーなどが大和通りを西へ続く。「路傍の人は震災の時よりも損害浅きか、彼の人々持てる物多しといへり」

25・26日 この頃から、中野の家々は家財に値を付けて沿道に並べ置いている。

4月20日 中野で火災があったが家は無事という知らせを受ける。

5月30日 妻が中野の様子を見に出かける。25日の大空襲で隣近所が罹災する中、鳶魚宅は無事だった。

11月28日 不二ホテルの高野兄弟に付き添われて上京。中野駅の東側が家屋を撤去されていて様子が変わったために帰り道がわからなくなり、長いこと迷った。

12月3日 松源寺と談合、龍興寺にも面会。

12月4日 薬師のあたりを巡見する。

7月3日 前日野方の一九会に行き、この日は松源寺、龍興寺に行くがどちらも不在。中野昭和通の町田理髪店にて髪を刈ってもらう。「旧知にて心よし」。

野方の一九会に行った記録が3回確認できる。1月23日、4月17日、10月2日。

年（西暦）	年齢	出来事
昭和26（1951）年	81歳	妻の八重、66歳で死去。かつて疎開した不二ホテルに引き取られる。「明治・大正人物月旦」を『自警』に連載。
昭和27（1952）年	82歳	5月14日、不二ホテルにて永眠。遺稿は生前の遺志により早稲田大学演劇博物館に寄贈された。
昭和31～34（1956～59）年		『三田村鳶魚・江戸ばなし集成』（柴田宵曲編、全20巻）青蛙房から刊行。以後も同社は鳶魚の著作を積極的に刊行する。
昭和43（1968）年		「三田村鳶魚終焉之地」の碑が不二ホテルに建つ。
昭和50～58（1975～83）年		中央公論社より『三田村鳶魚全集』（27巻、別巻1巻）刊行。別巻以外は77年までに刊行。別巻のみが83年の出版となった。
平成8～11（1996～99）年		中央公論社、中公文庫内シリーズとして『鳶魚江戸文庫』（36巻、別巻2巻）刊行。刊行中に中央公論新社となる。
平成17（2005）年		最後の輪講『懐硯』の記録が、クレス出版より出版。
平成21（2009）年		不二ホテルに残った遺稿が『三田村鳶魚遺稿 明治大正人物月旦』として逍遙協会より出版。
令和元（2019）年		青蛙房が年内をもって廃業。鳶魚作品の新品が入手困難になる。

参考文献：『明治文學全集 90』 筑摩書房,1972

「年譜」

『三田村鳶魚全集』第25～27巻 三田村鳶魚/著,中央公論社,1977

日記 上中下巻

『演劇研究』（31）,早稲田大学坪内博士記念演劇博物館,2007

柴田光彦/著「演劇博物館所蔵の三田村鳶魚日記について」

『演劇研究』（32）,早稲田大学坪内博士記念演劇博物館,2008

柴田光彦/著「演劇博物館所蔵の三田村鳶魚日記について」

中野に関する記述

[Redacted content]

展示風景



▲ 展示スペース全景



▲ ガラスケース内



◀ ポスター

展示物



▲ 『日本及日本人』 204・206号 政教社, 1930年
東京都立多摩図書館：所蔵



▲ 『日本及日本人』 205号 政教社, 1930年
東京都立多摩図書館：所蔵



▲ 『江戸ばなし 1』 三田村鳶魚/著, 大東出版社, 1942年



▲ 『江戸ばなし 2』 三田村鳶魚/著, 大東出版社, 1943年



▲ 『江戸の生活』 三田村鳶魚/著, 大東出版社, 1941年



▲ 『江戸の唄』 三田村鳶魚/著, 春陽堂, 1940年



▲ 『江戸雑話』 三田村鳶魚/著, 春陽堂, 1927年



▲ 『江戸の実話』 三田村鳶魚/著, 政教社, 1936年



▲ 『江戸年中行事』 三田村鳶魚/著, 春陽堂, 1927年



▲ 『芝居風俗』 三田村鳶魚/著, 歌舞伎出版部, 1928年

第18回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚ブックリスト

請求記号のないものは未所蔵資料

三田村鳶魚の編著作

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
西鶴輪講 全5巻	三田村 鳶魚/編	青蛙房	1960~62	913.52	イ
江戸の女 (江戸ばなし 第3冊)	三田村 鳶魚	青蛙房	1956	384.6	ミ
江戸生活事典	三田村 鳶魚	青蛙房	1976	380.3	イ
江戸武家事典	三田村 鳶魚	青蛙房	1976	M79	B
御殿女中	三田村 鳶魚	青蛙房	1964	384.6	ミ
明治文學全集90 明治歴史文學集2	瀬沼 茂樹/編	筑摩書房	1972	918.6	メ
未刊隨筆百種 全12巻	三田村 鳶魚/編	中央公論社	1976~78	914.5	ミ
三田村鳶魚全集 全28巻	三田村 鳶魚	中央公論社	1975~83	210.0	ミ
捕物の話 (中公文庫 鳶魚江戸文庫1)	三田村 鳶魚	中央公論社	1996	322.1	ミ
江戸の女 (中公文庫 鳶魚江戸文庫2)	三田村 鳶魚	中央公論社	1996	384.6	ミ
相撲の話 (中公文庫 鳶魚江戸文庫4)	三田村 鳶魚	中央公論社	1996	788.1	ミ
娯楽の江戸江戸の食生活 (中公文庫 鳶魚江戸文庫5)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	382.1	ミ
江戸の白浪 (中公文庫 鳶魚江戸文庫6)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	368.6	ミ
御家騒動 (中公文庫 鳶魚江戸文庫7)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	210.5	ミ
敵討の話 幕府のスパイ政治 (中公文庫 鳶魚江戸文庫8)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	210.5	ミ
江戸っ子 (中公文庫 鳶魚江戸文庫9)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	382.1	ミ
公方様の話 (中公文庫 鳶魚江戸文庫10)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	210.5	ミ
武家の生活 (中公文庫 鳶魚江戸文庫11)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	210.5	ミ
加賀騒動 (中公文庫 鳶魚江戸文庫12)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	210.5	ミ
江戸の花街 (中公文庫 鳶魚江戸文庫13)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	384.9	ミ
目明しと囚人・浪人と侠客の話 (中公文庫 鳶魚江戸文庫14)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	322.1	ミ
江戸の春秋 (中公文庫 鳶魚江戸文庫15)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	386.1	ミ
大名生活の内秘 (中公文庫 鳶魚江戸文庫16)	三田村 鳶魚	中央公論社	1997	210.5	ミ
御殿女中 (中公文庫 鳶魚江戸文庫17)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	210.5	ミ
札差 (中公文庫 鳶魚江戸文庫18)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	332.1	ミ
芝居の裏おもて (中公文庫 鳶魚江戸文庫19)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	774.0	ミ
江戸人物談義 (中公文庫 鳶魚江戸文庫20)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	281.0	ミ
江戸の旧跡江戸の災害 (中公文庫 鳶魚江戸文庫21)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	210.5	ミ
泥坊の話お医者様の話 (中公文庫 鳶魚江戸文庫22)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	210.5	ミ
江戸の生活と風俗 (中公文庫 鳶魚江戸文庫23)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	382.1	ミ
江戸の豪俠人さまざま (中公文庫 鳶魚江戸文庫24)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	281.0	ミ
お大名の話・武家の婚姻 (中公文庫 鳶魚江戸文庫25)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	210.5	ミ
花柳風俗 (中公文庫 鳶魚江戸文庫26)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	384.9	ミ
元禄快挙別録 (中公文庫 鳶魚江戸文庫27)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	210.5	ミ
足の向く儘 (中公文庫 鳶魚江戸文庫28)	三田村 鳶魚	中央公論社	1998	291.36	ミ
芝居風俗 (中公文庫 鳶魚江戸文庫29)	三田村 鳶魚	中央公論社	1999	774.0	ミ
江戸生活のうらおもて (中公文庫 鳶魚江戸文庫30)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	332.1	ミ
近松の心中物・女の流行 (中公文庫 鳶魚江戸文庫31)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	912.4	チ
はやり唄・吾妻錦絵 (中公文庫 鳶魚江戸文庫32)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	721.8	ミ
人形芝居と能 (中公文庫 鳶魚江戸文庫33)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	386.8	ミ
芝・上野と銀座 (中公文庫 鳶魚江戸文庫34)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	213.6	ミ
芝居ばなし (中公文庫 鳶魚江戸文庫35)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	774.0	ミ
江戸雑録 (中公文庫 鳶魚江戸文庫36)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	210.5	ミ
大衆芸評判記 (中公文庫 鳶魚江戸文庫別巻1)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	910.26	ミ
時代小説評判記 (中公文庫 鳶魚江戸文庫別巻2)	三田村 鳶魚	中央公論新社	1999	910.26	ミ
鼠璞十種 上中下	三田村 鳶魚	中央公論新社	1978	049	ミ
赤穂義士 忠臣蔵の真相 (河出文庫)	三田村 鳶魚	河出書房新社	2010	210.5	ミ
信仰叢書	三田村 鳶魚/編・解説	ゆまに書房	1993	162.1	ミ
近世仏教集説	三田村 鳶魚/編・解説	ゆまに書房	1993	180	ミ
侠客の世界	村松 梢風/編著	国書刊行会	2015	384.3	ム
怪猫鬼談	東 雅夫/編	人類文化社	1999	913.68	カ
西鶴輪講『懐硯』 三田村鳶魚主宰	竹野 静雄/校訂・解説	クレス出版	2005	913.5	サ
明治大正人物月旦 三田村鳶魚遺稿	三田村 鳶魚	逍遙協会	2009	281.0	ミ

第18回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚ブックリスト

請求記号のないものは未所蔵資料

三田村鳶魚に関する資料

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
鳶魚江戸学	朝倉 治彦	中央公論社	1998	210.5	ミ
万太郎松太郎正太郎 東京生まれの文人たち	大村 彦次郎	筑摩書房	2007	910.26	オ
まちがい言葉おかしい言葉	宇野 信夫	河出書房新社	1988	810.4	ウ
野村胡堂・あらえびすとその時代	太田 愛人	教文館	2003	910.268	ノム
谷沢永一 二巻選集 下	谷沢 永一	言視舎	2016	918.68	タニ
女妖啼笑	奥野 信太郎	講談社	2002	914.6	オク
大江戸の正体	鈴木 理生	三省堂	2004	213.6	ス
座談会昭和文学史 第2巻	井上 ひさし	集英社	2003	910.26	イ
内田魯庵山脈	山口 昌男	晶文社	2001	910.268	ウチ
昭和二十年 第1部7	鳥居 民	草思社	2001	210.7	ト
時代小説盛衰史	大村 彦次郎	筑摩書房	2005	910.26	オ
東京の文人たち	大村 彦次郎	筑摩書房	2009	910.26	オ
鳶魚で江戸を読む	山本 博文	中央公論新社	2005	210.5	ヤ
江戸を楽しむ	山本 博文	中央公論新社	2000	210.5	ヤ
街道をゆく36	司馬 遼太郎	朝日新聞社	1992	915.6	シバ
わたしの20世紀	安岡 章太郎	朝日新聞社	1999	914.6	ヤス
三田村鳶魚の時代	安食 文雄	鳥影社	2004	002	ア
時代考証の窓から	大石 学	東京堂出版	2009	210.5	ジ
人間臨終図巻 4 (徳間文庫)	山田 風太郎	徳間書店	2011	280.4	ヤ
ことばの演芸館	池内 紀	白水社	1983	901.7	イ
大衆文芸館	八木 昇	白川書院	1978	910.26	ヤ
奥野信太郎随想全集 2 随筆東京	奥野 信太郎	福武書店	1984	914.6	オク
作家の手帖	松本 清張	文芸春秋	1981	914.6	マツ
三世沢村田之助	南条 範夫	文芸春秋	1992	913.6	ナン
松本清張全集 65 清張日記 エッセイより	松本 清張	文藝春秋	1996	913.6	マツ
松本清張全集 34 半生の記 ハノイで見たこと エッセイより	松本 清張	文藝春秋	1974	918.68	マツ
古書肆「したよし」の記	松山 荘二	平凡社	2003	024.8	マ
秋田雨雀日記 第4巻	秋田 雨雀	未来社	1966	915.6	アキ
近代出版史探索 3	小田 光雄	論創社	2020	023.1	オ
松村謙三 三代回顧録	松村 謙三	吉田書店	2021	289.1	マ
三田村鳶魚研究の軌跡	小谷 悦子	中央公論事業出版	2005		

井伏鱒二

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
井伏鱒二全集 第11巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1998	918.68	イブ
井伏鱒二全集 第12巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1998	918.68	イブ
井伏鱒二全集 第15巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1998	918.68	イブ
井伏鱒二全集 第18巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1998	918.68	イブ
井伏鱒二全集 第19巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1997	918.68	イブ
井伏鱒二全集 第24巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1997	918.68	イブ
井伏鱒二全集 第27巻	井伏 鱒二	筑摩書房	1999	918.68	イブ
井伏鱒二全集 別巻2	井伏 鱒二	筑摩書房	2000	918.68	イブ

岡本経一

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
綺堂劇談	岡本 綺堂	青蛙房	1956	770.4	オ
岡本綺堂読物選集1 伝奇編	岡本 綺堂	青蛙房	1969	918.68	オカ
岡本綺堂読物選集2 情話編	岡本 綺堂	青蛙房	1969	918.68	オカ
岡本綺堂読物選集4 異妖編 上巻	岡本 綺堂	青蛙房	1969	918.68	オカ
岡本綺堂読物選集5 異妖編 下巻	岡本 綺堂	青蛙房	1969	918.68	オカ
ランプの下にて	岡本 綺堂	岩波書店	1993	772.1	オ
団菊以後 (青蛙選書)	伊原 青々園	青蛙房	1973	772.1	イ
随筆 松井須磨子	川村 花菱	青蛙房	1968	772.1	カ
幕末明治史話	綿谷 雪	青蛙房	1971	210.5	バ

第18回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚ブックリスト

請求記号のないものは未所蔵資料

海音寺潮五郎

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
西郷隆盛 上中下	海音寺 潮五郎	学研	1987	913.6	カイ
列藩騒動録 全3巻	海音寺 潮五郎	新潮社	1965~66	913.6	カイ
武将列伝 上中下	海音寺 潮五郎	文芸春秋	1979	913.6	カイ
幕末動乱の男たち 上下	海音寺 潮五郎	新潮社	2008	913.6	カイ
海音寺潮五郎・人と文学	尾崎 秀樹	朝日新聞社	1978	910.268	カイ
作家の臨終・墓碑事典	岩井 寛/編	東京堂出版	1997	R910.26	サ

河竹繁俊

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
人間坪内逍遙	河竹 繁俊	新樹社	1959	772.1	カ
日本演劇とともに	河竹 繁俊	東都書房	1964	772.1	カ
日本演劇文化史話	河竹 繁俊	新樹社	1964	772.1	カ
日本演劇全史	河竹 繁俊	岩波書店	1979	772.1	カ
私の履歴書 文化人15	日本経済新聞社/編	日本経済新聞社	1984	281	ワ
作者の家	河竹 登志夫	悠思社	1991	912.5	カ
日本の名随筆 別巻10 芝居	戸板 康二/編	作品社	1991	914.68	ニ

柴田宵曲

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
明治風物誌	柴田 宵曲	筑摩書房	2007	382.1	シ
妖異博物館 [正] 続	柴田 宵曲	筑摩書房	2005	388.1	シ
新編俳諧博物誌	柴田 宵曲	岩波書店	1999	911.3	シ
古句を観る	柴田 宵曲	岩波書店	1991	911.33	シ
評伝正岡子規	柴田 宵曲	岩波書店	1986	911.36	マ
子規居士の周囲	柴田 宵曲	岩波書店	2018	911.36	マ
団扇の画(え)	柴田 宵曲	岩波書店	2000	914.6	シバ
古本屋の手帖	八木 福次郎	東京堂出版	1986	023.9	ヤ

白井喬二

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
富士に立つ影 全7巻	白井 喬二	富士見書房	1981-82	913.6	シラ
定本 白井喬二全集 第16巻	白井 喬二	学芸書林	1970	913.6	シラ
新撰組 上下 (大衆文学館)	白井 喬二	講談社	1995	913.6	シラ
さらば富士に立つ影	白井 喬二	六興出版	1983	910.268	シラ

坪内逍遙

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
新潮日本文学アルバム57 坪内逍遙		新潮社	1996	910.26	シ
坪内逍遙事典	逍遙協会/編	平凡社	1986	R910.26	ツ
春城師友録	市島 春城	国書刊行会	2006	281.0	イ
明治文学回想集 上	十川 信介	岩波書店	1998	910.26	メ
滑稽な巨人 坪内逍遙の夢	津野 海太郎	平凡社	2002	910.268	ツボ
明治文学全集16 坪内逍遙集	坪内 逍遙	筑摩書房	1969	918.6	メ
名著複刻日本児童文学館 第1集16 家庭用児童劇	坪内 逍遙	ほるぷ出版	1978	918.6	メ
桐一葉・沓手鳥孤城落月	坪内 逍遙	岩波書店	1993	912.6	ツボ
当世書生氣質	坪内 逍遙	岩波書店	2006	913.6	ツボ
坪内逍遙の國語讀本	坪内 逍遙	バジリコ	2006	375.9	ツ
父逍遙の背中	飯塚 クニ	中央公論社	1997	910.268	ツボ

第18回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚ブックリスト

請求記号のないものは未所蔵資料

土師清二

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
砂絵呪縛 前後篇	土師 清二	中央公論社	1980	913.6	ハジ
大衆文学大系11 長谷川伸・土師清二集	長谷川 伸、土師 清二	講談社	1972	913.68	タ
日本の名随筆4 釣	開高 健/編	作品社	1982	914.68	ニ
少年小説大系 第22巻 時代小説名作集	二上 洋一/編	三一書房	1997	913.68	シ
集成日本の釣り文学8	伊藤 桂一ほか/編	作品社	1996	918.6	シ
武士道残月抄	平岩 弓枝/監修	光文社	2011	913.68	ブ
怪奇・伝奇時代小説選集5	志村 有弘/編	春陽堂書店	2000	913.68	カ
時代小説・十二人のヒーロー	縄田 一男/編	新潮社	1990	913.68	ジ

南方熊楠

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
南方熊楠外伝	笠井 清	吉川弘文館	1986	289.1	ミ
南方熊楠	南方 熊楠	日本図書センター	1999	289.1	ミ
熊楠漫筆	南方 熊楠	八坂書房	1991	914.6	ミナ
南方熊楠全集 6	南方 熊楠	平凡社	1975	380.8	ミ
南方熊楠の宇宙	神坂 次郎	四季社	2005	289.1	ミ
南方熊楠	中瀬 喜陽	平凡社	2012	289.1	ミ
南方随筆	南方 熊楠	沖積舎	1992	380.4	ミ
大博物学者 南方熊楠の生涯	平野 威馬雄	リプロポート	1982	289.1	ミ
南方熊楠大事典	松井 竜五、田村 義也/編	勉誠出版	2012	R289.1	ミ

森銃三

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
砧	森 銃三	六興出版	1986	914.6	モリ
近世人物夜話	森 銃三	講談社	1989	281.0	モ
畫物	森 銃三	岩波書店	2001	020.4	モ
新橋の狸先生	森 銃三	岩波書店	1999	281.0	モ
新編明治人物夜話	森 銃三	岩波書店	2001	281.0	モ
森銃三遺珠 全2冊	森 銃三	研文社	1996	914.6	モリ
森銃三著作集 第12巻	森 銃三	中央公論社	1989	081.6	モ
森銃三著作集 続編 第5巻	森 銃三	中央公論社	1993	081.6	モ
森銃三著作集 続編 第6巻	森 銃三	中央公論社	1993	081.6	モ
伝記文学初雁	森 銃三	講談社	1989	281.0	モ
森銃三	柳田 守	リプロポート	1994	289.1	モ

戦前資料

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号	
元禄快挙別録	三田村 玄龍	啓成社	1910	210.5	ミ
江戸時代のさまざま	三田村 鳶魚	博文館	1929	382.1	ミ
横から見た赤穂義士	三田村 玄龍	叢文閣	1934	210.5	ミ
江戸の風俗	三田村 鳶魚	大東出版社	1941	382.1	ミ
江戸 雑話	三田村 鳶魚	春陽堂	1927	382.1	ミ
江戸の実話	三田村 鳶魚	政教社	1936	388.1	ミ
江戸の生活	三田村 鳶魚	大東出版社	1941	382.1	ミ
江戸ばなし 1	三田村 鳶魚	大東出版社	1942	914.6	ミタ
江戸ばなし 2	三田村 鳶魚	大東出版社	1943	914.6	ミタ
芝居風俗	三田村 鳶魚	歌舞伎出版部	1928	774.2	ミ
随筆 江戸の噂	三田村 鳶魚	春陽堂	1926	382.1	ミ
江戸年中行事	三田村 鳶魚	春陽堂	1927	P40	B

第18回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚ブックリスト

請求記号のないものは未所蔵資料

雑誌

題名	出版者名	記事名	記事著者名	請求記号	
東京人 2001年6月号	都市出版	対談 江戸の通人・三田村鳶魚を語る	池内 紀・山本 博文	ZG4	D/167
図書館文化史研究 第31号 (2014年)	日外アソシエーツ	三田村鳶魚の図書館利用	中西 裕	010.2	ミ
アサヒグラフ1949年9月14日	朝日新聞社	江戸趣味作家告知板		アサ	49/7-12
日本及日本人 204号 (1930年7月1日)	政教社				
日本及日本人 205号 (1930年7月15日)	政教社				
日本及日本人 206号 (1930年8月1日)	政教社				
日本及日本人 437号 (1944年11月8日)	政教社	大野画伯追悼座談会			
自警 34巻7号 (1952年7月)	自警会	鳶魚先生終焉記	野沢 純		
演劇研究 31号 (2007年)	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	演劇博物館所蔵の三田村鳶魚日記について	柴田 光彦		
演劇研究 32号 (2008年)	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	演劇博物館所蔵の三田村鳶魚日記について (承前)	柴田 光彦		

協力者・協力機関一覧 (五十音順・敬称略)

東京都立多摩図書館

日蓮宗 長光山本立寺

不二ホテル

南方熊楠顕彰館

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

第 18 回 中野区ゆかりの著作者紹介展示

三田村鳶魚

～文園に花開いた江戸学～

発行年月日 2022 年 3 月 31 日

編集・発行 中野区立中央図書館

印刷番号 3 指中教図中第 357 号

所在地 〒164-0001 東京都中野区中野 2 丁目 9 番 7 号

TEL 03-5340-5070 FAX 03-5340-5090



中野区立図書館

<https://library.city.tokyo-nakano.lg.jp/>